貞丈雜記

六之下

12
210.09
I521t
W

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』 請求記号 210.09-I521t

ガラス使用

210.09 I521 t

一 鼈羹（ベッカン）の蒋掛（スリ）立の山芋いも之外砂糖
赤小豆（アヅキ）之外小むきのこ多煉（子）を合せむして
也色赤く右何をもさゝずうを入ざれいあまず
一 白魚羹（ハクギョカン）掛蒋白さげとうふ
魚の形のめんのめくるゝ中へ栗を四ツ入むしてよき時分
取出し一切り厚さ鮎（アイ）ぐらいのことく是亦右同
羹（カン）の汁（シル）ハ皆さゝれこその汁也又海苔汁を用る事あり
の掛塩一ツまみ入小麦の粉を入れどろくなる位まで
移せて壺屋之三日程ねせておき歩す時分鍋
へ汁を入湯せんそさろ〳〵そまでも沸つぎまでも入出まで
あ

鮎（あゆ）之子持鮎塩漬

雑記六

二十五

2546

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t　　ガラス使用

つきハ祢ぎるぬるめまして よく口のさき人をけ吸ひ老人ハ吸く

一腸(ワタ)煎(イリ)ハ鯉の腸をたれそのまゝそのまゝ煎るとき右のひれをさす
鯉のかきをこんろといふ右のむれ。さひれと云誕生の時子
拇(擁)敷ひも右のひれ。うしろと云移(ワタシ)徙の時波うのひれを用
一かざめ(カニ)と八蟹の如くそのまゝくのはさみ大なる物
一きり皮(ヒ)とハ柚(ユ)の皮の事なり云 貞丈按ニ橘皮(キツヒ)
ごんきりとハもむのかわ(アマセケヅリモノ)るを云和交削物ある用
一うの焼とハ鯛のひをを串よ寿(ス)なして焙(アブ)て冷(キ)ましを付添肴
すゞよ歩也 貞丈按肴のひれを串ハ書く
うの不動の形のごとく
一くぢびきとハ臭(クサル臭く)の名なり西國四國をふねうと云ハ誤なり

一ぬうさゝみとハ鮫(サメ)の魚のさゝみ
一せんごとハ鱸(スヾキ)のちいさきをいふ
一ねのびをとハ鮑をひらかず煮よ生るまゝ
ころりのうねばねりの不盛之 又あらまし
一打ぎり切とハ細くけづりたる事
一ろうのうとハ鰹節をうすくけづる事
一ちかのかとハ鰹節を大よ削りて
一ひしお(スヒシホ)とハ魚をちよ搾り醤(ヒシホ)ゆ
びきをれそを煮立て魚をを入一ぱう煮立いもを入柚の
皮を当て出すなり

雑記六

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

一里芋うざくと川魚の小きを二ツ串ざしにして亀足(キリ)をさし
て出次形り

一打豆と云ハ鯉のさしみ亀脚を細くけづり入てそへ出す又男ふ
先のひれ如ふ右乃ひきを盛て橘皮(キツヒ)花椒葉の基あるべし

一法螺(ほら)とハ具の名之光螺(ムラライ)と書て蝸牛(カタツブリ)ほる物之

一たちざる魚さとハ魚の牙をぬきはがこるするめく摺まつぶして
圓(まる)のめく枇杷(ビハ)のこのたきほ丸めてくちの一まて黄色ほ乳
をぬてたれそそて煮てさましたちの枝ほ少葉を付てそれ
ほさして亀足をぬて拵(こしら)へ煮ほる出し形り

一梅干さといふ魚の牙を摺つぶして梅のこほどほ丸めゆび
きてそれみそそて煮て青海苔(アヲノリ)を衣(コモ)ふかけて梅の枝さし
て亀足を付添ほなほ出し形り

一鴫壺焼(シギツボヤキ)とふハやき茄子(ナス)の上ほ枝ほ暗の頭乃形を作りて煮
ほる出し形り

一もちんとハ魚の事なり何ほてもいもこらをもり合こんぬほ白こたれそ
ほ煮て小口切ほまるをふ　本或いはこの中一山のいもをさし
こみてされこそそまるなり

一さくらいもとハ蛸(タコ)をうすく小口切りてされこそそ煮ほ
一うけいもとハ鯛の牙を摺つぶしてハ梅かごほ丸のてゆびきて
それこそそて煮ほ各ハ零(ミソレ)の吸物(スイモノ)とふ

一ぬくめ鯛とハ干鯛(ヒダイ)を洗ひ辛度(ソト)あぶりてまな板の上ほおいて槌(ツチ)

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

まてき記一げい毛のめく細くあるをむしりて盛る干鱈（ヒダラ）は
てもむる　干さをちひさく切てかまそあぶりて引さき細くして
もうばちうそもんい毛のめくまたあり
一あぶり丸のもの〳〵というあぎのもの〳〵うあさのすゝ八山椒國字
沼の里乃名物へ依て字沼丸とかく
一摺醤（スリヒシヲ）といふ魚をとるを切て塩をふりて酒をか
けて出すべし　大草殿お伝関書ゟ
一油魚（ノリ）かことゝ云魚の才を摺（スリ）煎（ヲツ）てまぜ其人てめびきそかあぶり
て切出すべし油苔の紙箱へめく見ゆるく巻それをうけ添肴などゟ出すべし
一藻搦（モガラミ）と云ハまき菜（アヲナ）をゆびき細ゟさきて魚の才を摺煎して
中へ入てのをかみのごくもるべし

一わう（ウ）の花いとゝいう紙切を巻すめそれてある物
一鮭（サケ）の式（シキ）乃記ハ背（セ）ひれ一二三の肉をうく實（セウ）貌也
一越川（エチガハ）ゟ鯉（コイ）ともうと云魚を舟の子白成を入て調へ夏の汁の實（セウ）とす
冬もあるもの略してよし〳〵と云魚をするのを又越川ゟ云
一魚ともろ〳〵を云ハ汁へ多ハあり豚ともろ〳〵
入也にあり
一鯛ともろ〳〵と云ハたいの鯛の肉をはりてあるところのめく通ゟ汁へ
一魚のもち汁のうへ魚の肉を作り豚ともろ〳〵摺（スリ）びしおよもてゐの腹を絞
〳〵ときて鍋（ナベ）へ入るまへ酒をかけさして雑煮するはあを入ときそ鰹（カツヲ）を入
煮ふとて魚を入（コロ）該て胡椒（コセウ）の粉を散（ハナ）し一柚（ユ）を入てまる〳〵の汁へ

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

一鮎のいろ〳〵鱠とつくる、鮎を三枚におろして細く作りて松のそを筏(イカダ)のごく〳〵四ツ並べ其上へ作りたる刺身を置上へ又筏のごとく松の葉を置又上へ刺身を置右の如くいくつにも重ねて置上へ松の葉を置て押(オシ)をかけ置也

一山吹鱠とゝは初夏の鱠〻鮒を作りて山吹の花の如く置上へ松の葉を置て押をかけ置也

一日照鱠(ヒデリ)とゝは削大根(ケズリダイコン)の上へ作りたる洗鱠を置上へ菊(キク)の花を置上へ又洗鱠を置上へ大根を置上へ菊の花を置上へ又洗鱠を置上へ大根を置上へ菊の花を置上へ押をかけ置也
（貞丈云笹吹を江戸にてはさゝうと云）

一雪(ユキ)の鱠とゝは下へ魚を置て上へ大根をおろし〳〵置上へ又洗鱠を置上へ大根をおろし〳〵置上へ菊の花を置上へ押をかけ置也

一夏鱠(ナマス)とゝは洗鱠を作りて上へ大根をおろし〳〵置上へ菊の花を置上へ押をかけ置也

一生姜(セウガ)鱠(ナマス)とゝは雪鱠の如く〳〵置て上へ生姜をおろし〳〵置上へ押をかけ置也

一卵の雪鱠とゝは卵の白身ばかりを取て其上へ雪鱠の如く〳〵置上へ菊の花を置上へ押をかけ置也

一越川(エチガハ)鱠とゝは鯉(コイ)を三枚におろして洗鱠にして其上へ大根をおろし〳〵置上へ菊の花を置上へ押をかけ置也

一羽ぶ〳〵とゝは雉子の羽(ハネ)をこはぐ〳〵として中へ入れてとさびをうけ出すなり

一鮒の色取(イロトリ)鱠とは作りやう〳〵ひしほをさし〳〵て出すなり

一鮎の皮引(カワヒキ)鱠とゝは皮を引て洗鱠にして盛(モリ)よくして蓼酢(タデズ)をかけて出すなり

一いけ盛(モリ)とは鴫鴨(シギカモ)白鳥(ハクテウ)の事なり其身を薄く細作りて其まゝ生(イキ)ながら盛(モリ)出すなり

一岑盛(キシモリ)とは鱠のさま〳〵盛形の名也

一雁木盛(ガンギモリ)とは鱠(フカ)のさま〳〵みありて〳〵諸(モロ)〳〵揃(ソロ)へて出すなり

一松笠(マツカサ)いりとは鯛の身をうろこ形に切てそのうへに刀目を入ゆ

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

びきれいに松葉の如くきれいそのまゝ
一歩海老(ウニエビ)の吸物とハはるゝ皮を引蜀椒の粉を交て板の上ゟ
押初(オシソメ)ひや麦あつを折ゝくしてさし
ゟて煮ゟ
一筋折(スヂウニ)と云ハ雲丹の毛ゟ〳〵そぎの方ゟ刀めを入てさきさけ
旅程よさける也あぶりてきそくをさしてゟ煮ゟ出ゟ
一焼ざめと云ハ蟹(カニ)の足をあぶり添煮ゟ出ゟ
一甲盛(カウモリ)と云ハ大蟹(フトカニ)乃甲をあふのけてやき蟹を中ゟもる
一鷹(タカ)乃鶉(ウヅラ)を足斗煮ゟ出ゟをひるゟ
一雉子(キジ)の首斗焼て煮ゟ出ゟ

一雉子(キジ)の首が手を煮ゟ出すを山ごぼう
一暑儀ゟ鳥の鳥を汁ゟも飲ゟ吸口ハ入ぬ
一雉子の燒ゟハ黒豆を添出ゟ
一鶉(ウヅラ)の煮ゟハ両羽を切ひろげ
皃を羽ゟ〳〵きと云也
一眴(ミギ)の煮ゟハ羽ゟ〳〵さいせず材の菓を
賞翫する迄ゟ出ゟ

一雲雀(ヒバリ)と云ハ雲雀の煮ゟの故実ゟ春夏秋ゟ依て
都実ゟ口侍雲雀ゟけ皃を賞翫ゟ上ゟ
一青ゟ鶉を出ゟ時鳥と綱(アミ)との猟(カリ)乃鳥の鶉ハ煮ゟ

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』 請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

貞丈云モリヤウニ
姫モリト云フアリ
膳部ノ部ニ繪
図アリ其上ニアラ
メラ置欤

盛ものゝ足を紙之外の鶉ハ足を横ニ折て上ノ仕
一 雉欤 始盛と云ハあつめを云盛る義ニ
一 がんぼ（ヒダイ）とハ干鯛（ヒタラ）干鱈をもどし
一 花ありとハ色〳〵深て合てもるを云
一 そぎもの（さあのかう）とハ干鯛ごんぎりたるをふとゝそぐ
一 はま（ハマグリ）とハ廻し盛のことぐちをいふなり
一 鳥の羽とハ大うまの内（まぐろのひれあつめを入れ燒て
切をいふ板ニ多くもる
一 筋引（スヂナミ）とハ筋の筋を引
一 鮒（フナ）の重波（シヂナミ）とハ身ぞりて小口切にして盛るさゝ〳〵

一 雉子の引ゝれ身と云事ハ雉子を縦ニ半分ニ切
を引ゝれと云るハ尤不宜ハ誤ニ成ものなり
（貞丈云此説あやまりニ似たり
本説四十八丁ニ引ゝれ合せ一
一 取ものとハ土器（ヒキノハ）ハ檜葉南天（ナンテン）の葉なとをいまして肴を
うへ玉器ニもるを精進の時ハ梅づけ（ハリ）昆布なと
ふり皃をこうるうけの物と云ふ
一 ゆ花とハ萼（キヤウ）板（キノイタ）ニて作りもる花なり 多花ノ
生ながら花をいふ （貞丈云旧記ノ献立ニ菓子ノ中ニカラハリト有
ウス板ノ作リ花ヲカガリニ用ルカ
一 小串（コザシ）とハ小串ものを云ふ
一 沈盛（チンモリ）とハ鮫（サメ）の魚の干物（ヒモノ）を削（ケヅ）て土器ニ盛て出ス

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』 請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

沈香ヨリ以下ハ其名トスル
ヘシ

一 多鈎上(ウハ)翌(マキ)の事白鳥ハ水カキ又ハ首骨ハ露ハ黄筋ハ是ハ時節ノ物也
雁ハ水カキ鴨ハ赤足五位鷺ハ夕貝ヲ切テ置ナリ雲雀ハ懸爪(カケツメ)鶫ハ黄足
水札(ケリ)ハ尾白筋鴫ハ觜(ハシ)貞丈云賞翫ノ物ヲ上置ニスル也

一 こいおふくの子 魳(コツブ)(本ママ)ハ海草 鱸(スバキ)ハ榎葉 海松(ミル)ハ松葉 鯉ハ
桃花 生鰹ハ庭床 鮎(アユ)ハ藤葉 雁ハ水草 雹ハ芦葉 鴨ハ
芦 鴫ハ澤深 鶉ハ根笹 雲雀ハ地草又ハ蔦
芝草

右ノ外奥多ますます檜葉をおゝ〳〵ます〳〵葉ハ
いゝときく事あり口傳

一 盛り合せぬ品〴〵の事 猪(イノシヽ)ハ兎(ウサギ)。幸螺(ニシ)ハこんまく。雑ハ

貞丈云ホヽチ江アヘハイナダトニヘ

○ハマチ 江アヘハイナダトニヘ

貞丈云ホヽチハ秒
糖ニうをぎよ狼杏ツ
くぼ〳〵ニ赤貝ヲ
とくひ合ル毒ヨリ
能ニ盛合ル事ヲ

生ノカツホハ性熱ナル
ユヘ其毒ニアタリテ酔
コアリ庭床ハ性寒也
サレハ寒ナル庭床ノ葉
ヲ用テカツホノ毒ヲ
消スナルベシ

光大日夫木抄廿三
雑部鮒衣笠内大
臣の歌ハ〳〵
もゝ〳〵かゝ由
なるつゝやきある
中の玉章

一 鯉(コイ)鯉(タヽキ)。鯖の魚ヨ鮸(ハヘ)ハ榮螺(サヾイ)。鮭(サケ)ヨハ
百日の内ヨ必大病を煩ふ 貞丈云ホヽチハ本草ニテ考ヘ

一 奥多組合の事 左ヨ山の物右ヨ川海の物ヲ以テ山の
田の多ハ川の魚多ハ別ヨセヘ〳〵 鱠の事ハ何も左ヨ引
ル

一 鮒(フナ)の包丁 梅花六七寸斗の鮒ヲ腹の内ヘ結昆布(ムスビコンブ)串
柿(カキ)苧(ケシ)燒栗(ヤキグリ)を入テ〳〵ハさてのまヽハ常ヨ調進スル物ニ
ハ〳〵汁ト云ハ芋(サンシヤウ)ゐの汁ノ事

一 山椒(サンシヤウ)魚(ウヲ)の子添肴又ハ引肴の吸物の向菜ヲゞヨ出スル
ニあり魚ヲ式寸斗ヨ切山椒味噌ヲ付テ出スヘ

一 貝ありとハ貝焼の事也

雑記六

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

一鳧 もとより水ちかき所を好む
一鳥の総称 そこにハ多の股を云
一青鳧（アヲガモ） 渕汁にハとろくるゝ 鵠（クビガ）雁（カモ）鴨すべて 地のけておきどろくを度ゝ（生ける時多を入て出すゝめ）ごとし
一ごんきりと、ハちもの初ゝる
一あいぎやうとハ塩あゆのごとく 但子持る鮎を塩ゝ〳〵るゝまなきハ 塩鮎とゝる
一金奥とハ口の黄色なる鯉のごとく
一さゝくりとハ鮫（すゝ）をかゝ〳〵て 熬（いり）酒の初ゝ〳〵めるゝ
一かうすとハさゝらの子又ゝるゝ〳〵のごとくをかゝ〳〵 （ミヤウギナ 名古屋ニテ云 江戸ニテハボラト云）
一かゝ〳〵のおとハかゝらけ物を云又ゝるゝすゝとも云

本名こぎ〳〵と云らずと云を忘てクルゝと云
一くゝ多〳〵とハ多りのごとくをつゝ 一説鱠のごとく云非ゝ
一きくらごとハ鱠のごとく也菊のおのごとく〳〵
一ゑぶりの事 欤（ヨ）ヒレヲ立テ出ス魚也
ひれとらハ鯛（タヒ）と勢（スギ）とまるうつを鮃（ヒラ）ごとく
一鮒の一こん煮とハ小鮒を一ツ丸のまゝ 味噌汁にて煮る吸物の事あり 式三献膳部記ニ見大草流
一鶉の羽盛（ハモリ）とハ鶉の焼ゝまゝ羽と頭を置ゝ両羽をひろげさる如く羽を頭の左右に置ゝ小ゝめるゝ 同お
一鮒のおぐりとハ鮒を煮て煮汁をこゝろ〳〵せるゝ煮ハとゝろせん

辻或旧記抜書之分也

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

を入て煮てさま〴〵せんこゝろもちあるべし

一いもこのふと煮ハ油(ユ)嵐の布のごとくなるをあさきを少切てそえ九のまゝそれこそえて煮をすゝめ出すべし 同前

一鴫(シギ)の羽盛(モリ)とハ鴫の燒(ヤキ)るを小角(コカク)にもりて頭と羽と羽とを形(カタチ)のごとくおくべし 同前

一このころ桶(ヲケ)ハ足(タリ)げおくふさもあり彩色(サイシキ)あり

一さゝ〳〵くりげとハくりげをちと大きに切りこゝろもちあり

上てその上に花びらをおくべし 同前

一海老(エビ)のふるまひとハ鮞のなまをうろこけづる盛(モリ)てその上にはしを先をあるべきこと 同前

一けぶるこんぶとハ昆布をきざみ二三すぢほどたるきうその先をかるくまきこのけ五ぶほどのこしてあぶりふくべし

つゝくさもて紙もつゝみ 同前

一ゑびきうとハゑびめを長サ一寸ほどに切てけづりて一ゑびの形をしき中を空(ウツロ)として香をもるゝ 同前

一鴫焼ぶとハ木ずゑびの形をしき中を空として香をこめるのごとくしてそえありふさのごとき脇のくびを切てそえ

なでかぎうはもるゝ 前ハもすびの色ある彩色をもるゝ脇の頭も作りおくべきもの 同前

一そぎはむとハかつをの鱧(ハム)をうすきめをそぎてあるを上るゝ

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t　ガラス使用

一あすびのざく切と云ハ尾の方より切て一刀ニ切るのぞ也取
ちがへて頭をたてさばくおろして煮るを云切つくる
一鯛のくるんざくと云ハ鯛のせひれを串よさしてあぶりこまり
一鶏(トリ)よとこ葵と云料理あり是ハ肴よき物ニ用ゆ
生上よりそふ抱之先茎をとりて吸物を右のごとくして抱
のごとくこれ皮て可食之ニ十よ重て食ニ料理ハ不及沙汰
料理方よ在之稀なる事ニ 法閑書第一見
一鱸(スヾキ)の五色なますと、榎(エ)の木乃葉をうらおもてニ献よ添る之酢(ス)塩(シホ)ハうすめ之成ぬ
可有之 風呂記

東鑑巻十二丁ニ云
以五色鯛奥等為
有物

一鱸乃初音鮓と云ハ節分の夜の抱之鮎(アユ)鮓ニて有之ハ芹之是ハ大草の家乃秘事之此鮓ハ五献めよ多之 図分
一鮎(アユ)のつぐ鮓乃是も酢(ス)塩(シホ)うすめニ之大豆をぬるよをべき之
この差ハ物の葉ある事ニ打被ハ筏(イカダ)を二折よ高ニ折之筏
秘事之鮎のさび抱可斗也 同おく
一鯉(コヒ)の衣(コロモ)尾花 葵をちらし雑(サヽ)のごとく調ふ
料理の仕方ハ大草殿お借閲書又大草預料理の書
等よ見ニより依之ニ略ニ記さず序書をして可知べし
一かぶらと云奥一名ごぼと云川の中の石れ有よ伏しニおごして
石ごぼと云ハ魚鱗を出しニ煮抱之古歌ニ

筏ナス前ニモアリ
見合スベシ

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』 請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

甲立ハ土器ニモリタル物ノ外エコボルヲ留ル爲也只カザリトノミ心ウルハ非也

精進ハ私事ナリ主人ヨリ被下物ヲ拝味スルハ公儀ゴトヤ私事ヲバステ公儀事ヲ破ルハ礼ニアラズ

也其時ともよみ書るハ必魚の名乃ありけり

一饗（キヤウ）乃膳（セン）と云ハ飯ハ饗（キヤウ）を立（タテ）て放の名之饗ハ饗立也則甲立の事ニ甲立ハ紙すて折形をして盛（モル）ことを留（トド）ル爲也只カザリトノミ心ウルハ非也

一さてびてとハ何の魚すても作りて酒ハ塩をかへてひさしくおきて

承をいふ塩魚の類あり

一あはまぜのことハ草履お侍ハ書るをいふ

うを投けづりまぜて酒をひさしくしてハ取合せまぜるをいふ

一主人貴人位有の魚物をそなさしてハ下ゐ又ハおろしをいふ

とハ生ぐりのことなり其時ハ父母乃忌日又ハいのわと重き精進日あり

とも喰ざるハ参礼すして拘ふ人をいふ下ゐハ精進ずして

あるゐれとハ尋ねるを精進ハそれ〳〵其位ゝ不苦ハ百頃哉

可仕由ゐて頂戴して喰ゐきこと又ハ精進ハそれ〳〵其位ゝ不苦ハ百頃哉

とりて頂戴ゐる事ハ為るべきあり主人ハ主人の象徴ゐよ

ゐて中ゐ〳〵而後主人ハ主人の志を尊ふりざるを肝

要とする人ハ也禮也

一麞牙（シヤウゲ）と云ハ白米（ハクマイ）の異名（イミヤウ）也麞牙と書てくゞのきぞとよむ白くはきことをいふ米ゞくゞと云獣のきぞ有

仙書ニ曰くあり玉造小町とハ草紙ハ食（ショク）ハ右ゐげをくゝとあるハ此ゐ

東鑑巻之六二云給麞牙人別一斗云〳〵

一羹（カン）の名尺素往来ニ云雑膾（ザツクワイ）。鮮羹（センカン）。猪羹（チヨカン）。鹿羹（ロクカン）。鹽腸（エンチヤウ）羹（カン）。筆羊（ヒツヨウ）羹（カン）

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』 請求記号 210.09-I521t

ガラス使用

羹。海老羹。白魚羹。寸金羹。月鼠羹。雲鱸羹。甚麼羹。三峯羹。
尖。碁子麪。乳餅。巻餅。水晶包子。禅林小歌二水晶包子。驢
腸羹。水精紅羹。驢脊羹。麝羹。猪羹。甫羊羹。寸金羹。白
魚羹。骨頭羹。都蘆羹　禅林小歌ハ建武
年中之僧ノ作也

一鷲の雪よ春の雛子の女島をハこゞ手めとりて笑話を
新撰夫木集よ寄紫恋とよめる題を原仲正「はるもあま
人の心をとりそよこゝの孫のきゞすはるゝ元てしのお
もひ出ハ鷲の雪を
なる木の枝あり

一鷲の雪と云ハ雛子を列ハ雪の籟鷲乃雅あゞ名を
笑話あり

一加賀と云ハ海膳の事ハ俗ニ海栗
のまを用　海膳ハうにと云也ハ
かゞと貝乃肉を去銭うるよこゝ奥州越前
あとより加賀奥州の初ものせびーとそハかぜゞーと略
語あり催馬楽乃我家のあるじ
をれうよ大君きこせむこまもせん。みそうなよ。御有
さゞをそのかゞやけん。とある時の
ギン
此の花へさゞむのぱ。さゞめくうぜを。一条禅閤兼良その梁
塵愚案抄よ風の事と云ひ誤あること我

一こゞめと云ハ白鳥の事ハ形大にして白ー

一鯨のかぶら骨と云ハ鯨の氷頭也あぶりと云ハ頭のあぶらかれ

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

をかんあるて花ゞつ不のゆく前ゞて醋・醤油をかけ又ハ吸物
あどゝもするゝとあバかりゝと考するゝ（肥前國ニそハ
ゐるゝとゞ

一鯨のおゞいけと云ハ尾と舌との間の肉也（肥前ニそハ
おゝけとゞ

一みそうじの事　糝（ユナガキ）をいふ俗よざうまいと云古今著聞集
巻十八（飲食の部）俊頼朝臣秋の末つかたなまあつみ（田上）といふ所に
侍りける家に「きのふ見し法師ハ猫の名ある」
まではゝきゝけるを　法師なと云ハ猫の名ある」
ぞとよびられハ法師なのいやおもひ侍りといひて又あしたゝきの
乃法師なのいまそいみそうづとそくそせるありけれハみ
侍りける家に「きのふ見し法師ハ猫の名ある」
まではゝきゝけるを　法師なと云ハ猫の名ある」
ぞとよびられハ法師なのいやおもひ侍りとて又あしたゝきの
乃法師なのいまそいみそうづとそくそせるありけれハみ

源順が和名抄ニ茶茗ノ字ヲ出ス順ハ天暦比ノ人ナリ是又明恵ヨリ以前也古代ヨリ茶アリシ證也和訓ナキ一ハモト異国ヨリ渡リシ故ナルベシ

一茶の事　栂の尾の明恵上人（鎌倉頼朝卿之時代之僧也）入宋して（入宋トハカラへ渡ルヿ也其以ハ国ノ名ヲ来ト云ヒナリ）茶の種を持ち歸國して植られしより好て日本
は茶ハかりと云説あるとも非なり茶ハ日本上古よりあ
しも也明恵上人異國の茶の種をもとめられしもあり
ぬ一茶の始ハあしゝ年中行事歌合季（キノミ）續（キヤウ）二月八月
内裏ニ百大盤若経をよませらるゝ乃ち寄の事（カキ）書ける云古ハ季（キノミ）御（ド）續（キヤウ）種（シユ）大（ダイ）豆（ヅ）
若（ニヤ）を春秋百（モヽ）まて藏（コウ）せられ仕るゆゑ引茶とて僧よ茶
を採ふくされて茶ハ昔より有ゑけのあてゝ拾ま
あるゝれハ大内（ヲホウチ）まで茶園（チヤエン）まて仕るよ中比栂尾（トカノヲ）の何の上
人やらん茶の種をうゝられるゝゆゑ栂尾ひがまて仕ふ

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t　ガラス使用

よく熟と云〳〵　右ハ二条関白良基公乃ち説也右の歌合ハ貞治五年ニ有て引茶とあるハ形ある茶を云ふ也引茶と云事多引出ものゝ引の字の意と其時宿より給ハり茶を煎して傍より呑せられし人

一本茶（ホンチヤ）　飛茶（トビチヤ）と云と海人藻芥（アマノモクヅ）よ云茶者自上古我朝ニ有挽茶の事會（カツ）テ於（テ）内裏（ニ）被（ル）行（ハ）公事儀式（ノ）処ニ菓上僧正入唐之時重而茶之種ヲ被渡栂尾明慧上人覧之サレバ本ノ茶ト云ハ栂尾也非上云ハ宇治等ノ事又云若キ人ノ人前ニテ茶持（モ）アツカヒ不（ム）知ハ笑（ケ）事ナリ建山ニ茶一服入テ湯ヲ半斗入茶筅（セン）ニテタツル時タフリ湯ノ音ノ聞ユルヤウニタツルナリト阿伽井顕弁上人被申キサレハ彼同宿トモノ茶タツル音ヲ聞ケハ左可然也

一とち粥（ガユ）ハ橡（トチ）乃木の實（ミ）を粥の中ニ交ニ煮ると太平記巻五ニ大塔宮熊野落の条十津川（ツ）乃民家ニ宮宿り給ひけれハ栗飯橡粥なとを参らせしを由見ると又橡の實を餌ニ法き交ニするをとちもちと云ふ又田舎ニて橡乃みを粉ニして搗て擇て蒸ニ歩のべて切麦なとの如く麺ニして食ニそれ是を橡麺と云ともちめんを作るニ早くさゝれたるみそのむす甚ニ多くの手間入さる事をとちめん搗を搗と云とそ人のよきりさ貞丈橡餅を食ニ初の程ハ黒赤く味ハうまきやうなれ共よくもむニ白くなり扨あぢハひ無之

おこて米ハ餅米
をスてそうてあ
餡うてくねてつゝめ
て竹の筒などよつ
きこみそちやうし
ちまきのあり
和名抄二文選註
云粔籹以蜜和米
煎作也和名於古
之古ヶ

一おこて米の事古今著聞集巻十八飲食部に法性寺殿元三は皇太后門院（まいらせ給ひしぐ）ぬをまいらせられ各ゝをとて、こゝをとゝ給ひてまいるとゝをとゝはのゝどよあてよぎうぐぜ申ひあうけれをはしのきぬのうへ可ゝくゝとりうをきるを打そうけるとゝぐゝあん侍りをおくく大草流正月祝儀膳之事京都将軍家御成の式乃書あり

一柚の庖丁の事古今著聞集巻十八飲食部に柚を切事、盃酌（ハイシヤク）の有様（サマ）盃を入て一度呑事（ノム）（ベ）侍ると、のやうのみな切をえて一度盃を入て一度ゝ

一あまその味噌ゝの古今著聞集巻十八飲食部に敦光朝臣のあと、京良ある僧のあるとのみそとゝ拙をもて、おそうなるまいつのをとうるぞとゝひとれば、僧のあすゝそ敦光朝臣「みの法ゝをもてけふとまいるあすゝそ敦光朝臣きろゝん拙をもあまそうみそハ乃ろうそのゝ事ゝ（今ろうそゝそ乃ろうそゝ）職人尽歌合の絵（土佐光信筆）乃ろうそうとの絵の和よもけさ奈良よをきてくるやとありうそ氏の名拙をて曽ハあすうそゝとゝふ後よハろうそ味噌といひあるゝ（ろうそ味噌有よあり）

一たゝあゝことのこ古今著妙集（巻十八飲食部）云右京大夫顕輔卿のをよ盃酌をきるにたゝみめゝことのこ我着よをあり

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

を見てあるへ「あくこあよきそ有てあのうけ里 前よりけるあくさうくひつけ侍りる〳〵こてものこゝろやきまさるらん
こゝのこハまこともよ芽の芽さうえ 茶六七月の比暑氣
弥の子と云たぐいのことでなり
一 南天燭(なんてんしょく)の葉 俗よめんてんと云 赤さゝる木なり 毒の多き外食物のこゝろする
事ハ食物乃味のそこなわざるこんぐあるえ 茶六七月の比暑氣
強き日も食物ハ南天燭の葉を茶又ハ土よりおろひお
けゞ食物饐(すえ)るまきえ
毒を消せ物え
一 禁中女房の司食物異名品〳〵禁裏女房内〳〵記す云
〇くさむの御膳といふの比獦 新也〇きゝやきとハ豆腐ゝ姓有
〇ほうざうとハ ぞうりのまうなりわらぞうの秋と云〇比ひるとハ ひれのまく〇比みそとハ
さうすいのまうなり〇白き九あんとハ 餅りほのまく〇 茶ぐさくちん 赤小豆まて煮ふ もちひのことなり〇こそ
ぐごとハこゝろめしのことなり〇さく茶いとハ七月七日ふるさき物の〇くぐ物とハ
ぬくまうなり〇まゝもとハいものこと 拵る餅のまく
まもありすゑて御食を供御(ぐご)と云又飯の事をも供御とふ
又飯をハざいと云又ハものとも云〇比汁 汁なり〇それそのの
汁をぶくと云〇比湯ふうさいのことく〇こん 魚の青く又ハさゝるとも〇比湯あとハ奥の
〇比志屋じ物とハ 精進 魚也〇ふとうおとうとう 雁のまく〇比ひる 鯛のまく〇うきく
のまく〇元もゞ 茶のこと 奥のこと又志ゝみとも云〇めゞみ物 茶ひのまく〇すゝ
ゞすゝのまく〇おこのうえのまく又この川くさ云〇えあだ なまこのこと〇くろも乃

海人藻芥ニ云内裏仙洞ニハ一切ノ食物ニ異名ヲ付テ被召事也一向不存知者當坐ニ迷惑スベキ者ナリ
飯ヲバ供御酒ハ九献餅ハカチ味噌ハムシ塩ハシロモノ豆腐ハカベ索麺ハホソモノ松蕈ハマツ鯉ハコモチ鮒ハフモジ 鶏ハツモシ但ツクニハ供ゴニハ不備ツクくシハツク也
蔵ハワラ葱ハウ米如異名ヲ被付近比ハ将軍家ニモ女房達皆異名事スゝ御菜ヲバ御メグリト云常ニオハリト云ハワロシ杉原ヲ

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

ハスイハ引合ヲハキ
ト申ナリ
右海人藻芥
○てるしまとハみるの
ヨリ　ろろとハちひ
さげのこと　たまとハ
こんよやくのヨリ
ろくみとハさゝ一このヨリ
ゆ一のとハ此ん
このヨリ　ろぐとハ
ゆと大こんのヨリ
ところとハめうどのヨリ
小これいとハ午房のヨリ
てんすとハかんてん
のヨリ　ろ子とハ山のい
ものヨリ
右ハ享保六年酉
廿七日法皇林泉寺
宮江御幸ノ記ニ
見エタリ

いもこ
のヨリ　おもはゆ　なますのヨリ　又ほのたねとも云○山ぶき　ふきのヨリ○ちゞいおもな
もゝ
のヨリ　○ひろめ　くれいのヨリ　又ゆきぬのうきともゝ云
すゝおそとも云○ろろく　こうぞけのヨリ　○さゝめ　さゝげのヨリ○ひろおもな　さゝげの
ろくみとハさゝ一このヨリ　ゆ一のとハ此ん　このヨリ　ろぐとハ　ゆと大こんのヨリ　ところとハめうどのヨリ　小これいとハ午房のヨリ　てんすとハかんてん　のヨリ　ろ子とハ山のい　ものヨリ　右ハ享保六年酉　廿七日法皇林泉寺　宮江御幸ノ記ニ　見エタリ

○ゆきの　鱈のこと　○ゆざめ　こごめのヨリ　○たゝ一　たこのヨリ　○おいそ　うなぎとのヨリ　○おひろ一　水のこと　又井の中とも云○おもはゆ　なのこと　きづのヨリ　○ゆちん　もちのヨリ　○くもん　おのくさの葉のヨリ　○そびろ　ちさのヨリ
○あふひ　そぼのヨリ　○おいたみ　柚のこと　又ろろものも云○このべ　そうがのヨリ　又ろろ抔とも云○くさおす　柚のこと　○屋きおうさ　やき姫のこと　○むし一　ゝゝのヨリ
○あすなすびのヨリ　○くゝそう　何をゆ　なのこと　○さゝげ　ささげのヨリ　○ゆろねたんのヨリ

○ひとをし一　祝ぎのこと　○ゆゝさゆぐ一　ゝゝのヨリ　○何う　赤小豆のヨリ　又なりくともゝ
○にゆぐ一　ゝんまく　○ふ屋く　こんまゝくのヨリ　○ほんまんぢう　ゝろのおものヨリ　仏一
味ゆづけの白ろゝそのヨリ　○ごんこぶう　ごぼうのヨリ　○ろろひ　ろろひのヨリ　○まろ　まろだけのこそも　○さけ　たけのこのヨリ　○あさくあさづけ　のヨリ　○ほくつぐし　ゝのヨリ　又そうくとも云○いと
すゝめなろ　ゝろのヨリ　○くろとゆ一　びのヨリ　○ふし一　ろろのヨリ　○おゆ　湯○さゝそう
きうむ　ぎのヨリ　○みそくあ一　ゝのヨリ　○ごゆくし一　ぢのヨリ　○つめさちし一る　ひやゝるのヨリ　○おそろ
ぎうもい　のヨリ　ゝそと斗もいくし　ゝそうげの略語あり　○すまき　ちまきのヨリ　○うすゞみ　そばろのヨリ
○つめくいぞろ　ひやむきのヨリ　○あづを是抔とも云○殘をおゆ一　又ゆく来ると云
○きくみを　中細　なのおそと云○うすを洗ふくとゆ一つるのまを切そ
ぐろとも云○ふぎゆうよあるをさ一合とも云　右ハ上箱名ヲ記ス

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

見さう右の祠ともい大うさ五尺門院の比の詞之今世ハ
かるまさる事も又用ひられざる事もあるべきぞ
一式三献の肴椎茸式書ハ云本膳引さし也二の膳うち
こあり是ハ鯉のうすづくをさ〳〵このめく作り土器ハ式寸斗
高く杉あるハ盛右組(ウヒタ)左組(サヒタ)の別れをさ〳〵金銀の露を
置く也(ウスミトハ腹モノ呼身ノウスキ呼也右組左組ハ左右ノヒレナリ流儀ニヨリテ露ナシ)三の膳ハさうく
是ハ鯉の刺身どころを作り同腸(ワタ)を小口切りて三ツ上よおく
〳〵右組左組をさすく味噌ハて煮る汁ハ入べからず
云〻大草流と引合考へ〳〵
一おんざと云ハ穏座(クツロギ意ノ)と書く貴人各上座の間ハて饗應(モテナシ)あ

る我ハ次の間ハ居て相伴(ヘウバン)をハ穏座と云貴人と一座
ハて相伴せず一室隔て次の間ハてお供をハするを云
一垣下(エガカイモト)乃座とハ公家ハて宴席の時正客の外れ人お供の衆を云
一名りぎりとハ髪のを長サ一寸斗ぞ切けづりて一片ツく墨く
一九ものとハ九ものを巻て縄ハて結て湯煮をしてさてちと
もミ〳〵ハて切てもるく 大草流
一けづものこんぶとハ昆布をそぎ二三寸斗ぞたてゝ切てそ先を
ねそくるまかけて五ツ斗ぞのごとしてひねてあぶりゆ〳〵ごこん
ぶつよくたるくそれをもるく 日おあ
一さゝ〳〵げとハ酢ハて大ね切て塩ありそのまゝちと大ね切て塩あり

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』 請求記号 210.09-I521t　ガラス使用

上をなめらかに擦(スリ)おくべし醋(ス)を加(クハ)ふるとも可(よし)

一もめ屑(くず)きとハ羹(カン)の切(きれ)くず花羹(カン)とかくべし

一陳(ふる)きとハもの多(おほく)陳(ふる)き菜(な)を煮(にる)とあのそのちいさき時(ころ)を曰(いふ)

一不(ず)ぞもと云ハ熟瓜(ジクウリ)の多(おほく)清悦(すゞし)公小野宮殿十引家集(いへのしふ)に云女(をんな)衾(ふすま)すのこま不(ず)ぞもをあらひつゝをこの世(よ)ならてをゆふぐち孔雀明王経(くじやくみやうおうきやう)

すれゞみのうしろもるゝ陰(かげ)ぞれうとそや

ぬる人ハ不(ず)ぞもを見てもあかれぬかくすらん　和名抄(わみやうせう)は熟瓜(ジクウリ)和名保曽知(ホゾチ)とよべり

貞丈云ホブフチノ畧語ホブ十也
瓜ノツエテ自ラホブノ路タルナリ

一莫食(なつめ)瓜(うり)甜瓜(てんくわ)と云物(もの)黄色(きいろ)にて円(まろ)き色の細(こまか)き筋(すじ)有(あり)て甘(あま)し今江戸にてハ真桑瓜(まくわうり)と云

一三(み)濃(の)の國(くに)真桑(まくわ)と云所(ところ)より出(いで)来(き)る瓜(うり)名(な)高(たか)く他国他和
云(いふ)奏(そう)して串(くし)ざし干(ほし)たるを又(また)しぶと云
一いなのうすはおほ〳〵のちいさき臼(うす)をいなの股(また)うすと云
のめくりある物(もの)あり江戸にてぶくと云(いふ)
しゝをも云(いふ)
江戸にてハもぐりの
魚(うを)ともいふ

一久喜(くき)と云ハ納豆(なつとう)の事(こと)汁(しる)に煮(にる)納豆(なつとう)のまゝ物(もの)を敲(たゝく)と書(かく)あり

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』 請求記号 210.09-I521t　ガラス使用

殿中申次記ヨ久表一桶トアリ和名抄ヨ云敦釋名云
敦是義及和名久木 丸味調和也
一粉熟（フンスク）トハ云ハ黏心（テンシン）の類之涼氏物語ニ高たこの
つきどもすてゝまいらせたまへりヲ云〳〵細流ヨ點いく節（ヤチ）
會（エ）の時もみそ餛飩（コントン）をいつ〳〵のうとんとの物の數〳〵花を
餧情ヨ粉熟（フンスク）ハ云ヲ云ヨ〳〵ぞ甘葛（アマヅラ）をうけてこゝ称あハせて細き竹の筒をしゝて
ゆでゝ甘葛をうけてこゝ称あハせて細き竹の筒をしゝて
玉中ヨかくくを〳〵入ておきてつき出し〳〵玉姿
双六の調度の如くまるゞしうそ物語（内仗の小のおとゞ）
よりまらうどの次さまのかおかきまいらせを路（ろ）それヨつゞき

細流の流いとゞ花鳥の説委シ可用之
延喜式内膳式ニ粉熟白米ト大角豆両種ニテ作ル事見タリ

四條流献方口傳書云粢ト云ハ上古ハ米ノ粉ヲ浄水ニテコヲテ團子ニシテ神ニ奉ル今ハ蒸熟シテ巻テ鶏子形ニ捻也

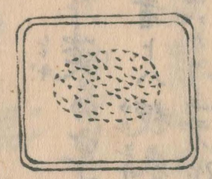
一てゝぞ〳〵ゆでゝ和名抄云粉熟（フンスク）辨色立成云粉粥（フンシュク）
今案粉熟即粉熟也
一碁子麪（キシメン）と云ハ小麦の粉を水ヨそこまて落くの〳〵ゆ
め玉て竹の筒の切口を内の方ヨ薄ク削て皮の方を落
双のめ〳〵して玉筒ヨて押〳〵切ヨまハ碁石の如くヨ切ヨ
大さ碁石のこと〳〵夫をゆでゝ〳〵豆の粉を衣ヨ塗ル
ゝて日本のちとぎのごとく調目ニ時珍カ曰單糯粉者（タンダフンヲ）
ちとぎの事（シトギ）粢（シト）の字也本草綱目ニ粢（シト）單糯粉者トハ粳米（ウルシネ）ヲ交ズタゞ
粢（シト）と云ハ唐の粢（シ）ト單糯粉者トハ粳米ヲ交ズタゞ
モチ米ノ粉バカリニテ作ルヲ云
ゝて日本のちとぎのごとく日本のちとぎと唐の
粢（シ）とハ別あり 粢ノ字ヲシトギノ字ニ古ヨリ用来リタレ共和語ニ漢字ノアテ違ヒヤリ然共用之

雑記六 四十五

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

さぎハ神道類聚名目抄ニ云餅米ヲ蒸シ熟シテワヅカ二餐(シキ)
鷄子(シ)ノ形ノ長キガ如ク造ルナリ

おとぎの圖



此場右の神道類聚名目抄ニ云ハ
神祭ニ用ルモノニ○つひぢつ形の鍔(ツバ)
をシトギツバト云ハ是の形ニ似タルヨシ

一五種(ゴシュ)の削物(ケヅリモノ)と云ハ大草流ニハ青(サメタリサメノホシタルナリ)黄(ノシアヒビ)赤(カツヲブシ)白(ゴシキリ小ノホシタルナリ)黒(イリコナマコノホシタルナリ)此五種をうすく削(ケヅ)りて
もるニ雑煮の膳ニ組するニ魚の甲ニ鳥の甲と
云ハ六角ニワゲる折形の如くするなり源氏物語
一屯食(ドンジキ)と云ハすごもり飯(メシ)のことなり

どんぢき緑のごとくひつと盃(サカヅキ)ありて孟津抄ニ云屯食つくりやうハ
云下らの如き強飯(コハイヒ)を握(ニギ)りかためて壱の重ねのごとく丸く長くこしらへるを云ニ今も公
家方にてハ握食(ニギリメシ)をどんじきと云ふ由京都の人物語せり

一鯉をハ燒て食(クハ)ざる物へと今世にも古ハ燒ても食(クヒ)ける
也新猿樂記 安永明衡作 云鰯(イハシノスイリ)酢煎鯛ノ中骨鯉ノ丸燒トハ鯛ヲ筒切ニスレハ骨ハ中ニアリ
今世鯛ノウシホ煮ト云モノニ同歟

一飯(メシ)を食(クフ)ニハ見ぐるしき咀嚼(クチヤ)音を消(カザリ)記ニハきらふべき姿のヲ
汁(シル)の汁 本膳の汁を吸て雪ニ二三の膳の汁を吸を云 さいのさん さいを食て雪ニ外のさいを食を云 膳ぶし 膳乃
むすぶまでくる膳の物を一つさいをいつまでもくひて椀を
持てそこにおくをまけ膳あるぬこ もろ

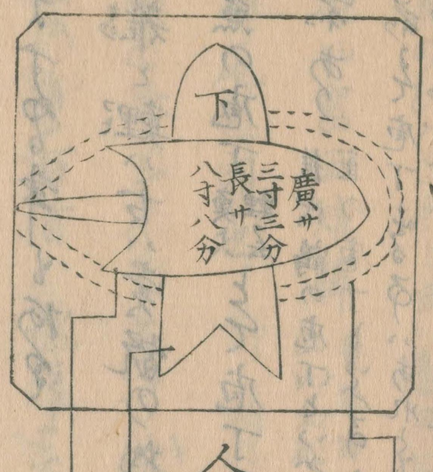
屯ノ字アツムルトヨム
飯ヲ握リアツメタ
ル也

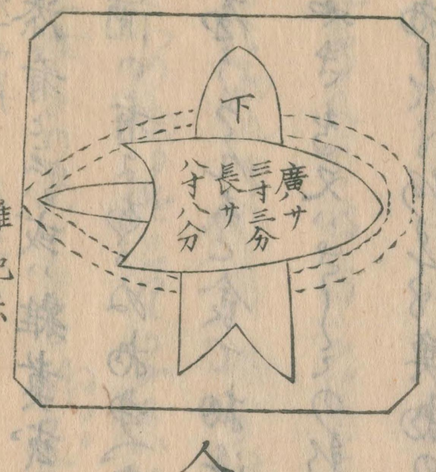
国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

おこし　椀と箸とを一度ゆるぐ二度ゆるぐ三度ゆるぐこれを飯のくひそめの時のるゐとあれこれいそ〳〵をやりてまどいうろ〳〵てさいをくぶるまうりまで箸　飯つぶ又さいふどの箸よりも箸をよこたてわたすこと八箸を六寸ばかり箸先を上へ向けて膳の柱をまたぐやうにおくこと　神主の箸　右の方よりすべるさい汁をうつす箸先八一寸ばかりあげて膳の柱をまたぐやうにおくこと

一矢箸餅（ヅヽ）のゐ兵具雑記ニ云具足の祝言の時着膳の幸とおなじて矢箸餅の図あり光源院御元服記ニ二重と矢箸餅を注文度ゆゑ猶一おくゐるべし

行松調進の由見エたり





雑記六

人前　左より喰同左の手にて餅ハ下の矢箸のさ記をかくのきるゐと

人の前六ツ也以上六かさゐあるべし

餅数十二也　右兵具雑記ニ見エタリ

ハウカシハノ葉

此圖兵具雑記より

人前　有右ゟ有をはちゟ食同右の手ゟ上の餅を左りのこくゟ喰也

――矢箸餅　有左右ニ別ニアルト見エ

――トガリ矢ノ形　ソエ有ナルヘシモチヲ食テ後ニ有ヲクヒ酒ノムベシ

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

一添肴（ソヘサカナ）と云ハ或ハ雑煮或ハまんぢう煮うめんさうめんのたぐひ酒の肴はあるぬ物ゆへ肴をそへて出すこと也雑煮ぬたぐろんなど食て物添肴を食て酒をのむことに肴をやきもの又ハさしみのたぐひを膳ゑ組ものなどゝ云ハ物ともいふとも奥物の肴を別の膳ゑ載せて本膳の脇ゑ置ますゆる事也

一雑（キジ）と鯉（コヒ）ハ古ハ賞翫の物ゆる庖丁家ゑ多の庖丁（魚ノ鯉ヲ云ヲとハ雑ヲ云）とて庖丁の式法ありされハ雑ゑも鯉ゑも名和あり（後代鶴の庖丁とハ雀を賞翫とせず故ゑ古ハ雀の庖丁ともいふるゆへ古ハ雀ゑ載ゑて庖丁せるゆへあれとも雑鯉ゑ白丁ますゝ貴人の物ゆへ式正の事ハ古ハ記しあるのみ）

一鳥のひづくれと云ハ雀の尾（ヲ）のとぐるゆへ和名抄云膊（ヒタレ）遊仙窟云雉膊（音翠師説二比タ太礼）説文云膊（今按如キ許慎カ説ノ俗ニ所謂阿ノ布ノ良シ之利是也）鳥尾の肉也

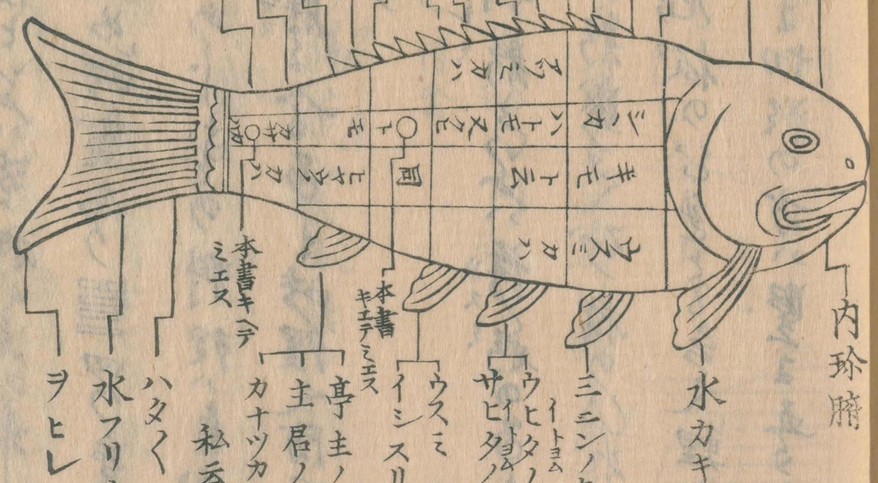
一雀のべつそくと云ゑ雉子（キジ）ゑ限ゑず近衛龍山公の詠百首の歌没ゑ云待うけの昔禁野（キンヤ）の雉（ヤエハ）子朝（アシタ）ゑ狩（カリ）ゑするゆへ雀ゑ雉子ゑ朝ゑするゆへ雀ゑされこそ待うけの化ゑ云ゑ時待の化ゑをそゝせけるとゑんそれより待の化ハもつてのほか雀おどれやすくとゑ用さいうあるをとるゑハ待うけハもつてのほかなれハやすくとゑ用之雑子のあしを剔足（ヘツソク）といひあるゑもとゑる禁野の雑子

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t　ガラス使用

まりおこれる當時の為ぞもち足ざるれども雉の足ざる限り今は別足ざるべし同じ山雞の足をば別足といふ爲ぞ

一雉（キジ）の名所（ナトコロ）の事當流献方口傳書は云四条流のごとく雉子の胸の肉をば鰹（カツヲ）ぬと云ふ背骨也山ぶけ共云鰹肉といふ者の胸の肉也ひつくれとは者の羽ぶくしは身（ミ）なる肉ざ犬（ケン）ざるべしといふ胸の平骨ざ雪まろぶ也とは肩骨の傷ざ右雉子の名所ざ絵図の如し

一鯉の名所左ざ絵図の如し　大草流

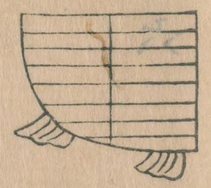


一初雁（ガン）の汁は木ぐげ青豆を必入也是初雁の為ぞ　四条流献方口傳書見

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』　請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

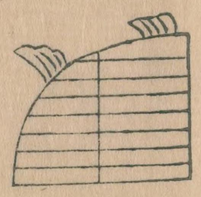
一鯉の三角皮の刺身と云尾先の肉の方をそぎて盛るべし
目前如形骨皮といふは皆形ある事にて骨と皮と
云もの晶重皮め此盛あり皆骨と云
一松茸椎茸あへ物などの料理は自然傷るべきなり
扨又防風を勝よく含ませ此程防風は木のまの毒を
去るものゝ由あり
一鯉の内形の刺身といふは背骨の多き鯉一ツを砂摺の
ごれを添て内形盛るべし砂摺のひれをいぶし
尾を右板尾板のごとくに鯉をおろし背みの
方を中より二ツに切尾の方は堅ふ

四ツに切べし鯉一ツを
男女二人前とするあり



右二生姜左二酢

一腸煎は鯉の腸を煎て盛也腸は頭と尾とをそぎて中より腸を
盛也是は料理の時べし内形よりは右も生姜右も酢べし腸
煎は塩とも生姜とも用ゆ



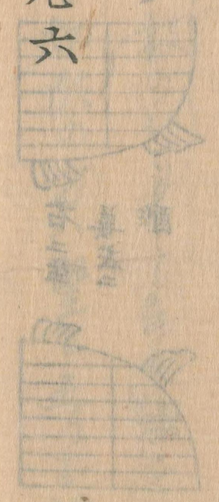
頭ノ方
左右ノ骨如此切テ
二人ノ内骨ニスル也
右同書ニ見

一鯉をうろこ引て内形腸煎二人分とるべし
尾も引ずりわりて盛と心得べし 同
一汁會之事文明十八年二月十七日親長卿記云藤中納
言以下人々来有汁會事 飯尾加賀守
二清房双役也 同廿二日昨日有名
衆内所小漬次有三十首御講歌今日此亭巡汁會也

雑記六

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』 請求記号 210.09-I521t
ガラス使用

貞丈雜記巻六



国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』 請求記号 210.09-I521t

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『貞丈雑記』 請求記号 210.09-I521t

ガラス使用